大洗の月
伊那の白梅

井上靖

伊那の白梅　大洗の月

井上靖

新潮社版

伊那の白梅・大洗の月

〈井上靖小説全集10〉

昭和49年4月20日発行
昭和51年10月30日 2刷

定価 950円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者 井上 靖
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 電話・業務部(〇三)二六六一五一一一、編集部(〇三)二六六一五四一一 郵便番号・一六二 振替・東京四一八〇八
印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

伊那の白梅　七
大洗の月　二五
水溜りの中の瞳　三六
あげは蝶　五八
落葉松　七六
頭蓋のある部屋　八八
断崖　一〇三
爆竹　一二六
美也と六人の恋人　一三三
石の面　一五三
ある日曜日　一六一
風わたる　一八〇
燃ゆる緋色　一九二

青い照明　二〇五
騎手　二一四
春寒　二三七
春のうねり　二四一
稲妻　二五八
末裔　二六七
みどりと恵子　二九五
湖上の兎　三一四
グウドル氏の手套　三二五
その日そんな時刻　三三七
ひとり旅　三八三
胡桃林　三九七
李さん　四二三
赤い爪　四二六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

殺意　四四四
青いカフスボタン　四五五
三ちゃんと鳩　四五八
自作解題　四六一

装画　加山又造

井上靖小説全集　第10巻

伊那の白梅

九谷が、はじめて菅(すが)みさ子という少女の訪問を受けたのは、三年前の二十五年の春であった。その時、九谷は夕食を終わったばかりで、アトリエの長椅子の上に寝転んでぼんやりしていたが、妻の咲子が取り次いできたその菅みさ子という名にはまったく記憶がなかった。

「女学校の制服を着た女の子よ。どこか田舎の女学生でしょうか。訊いてもはにかんでいてよくわからないの。修学旅行で東京に出て来たらしいんですが、お母さんが、東京へ行ったら九谷さんをお訪ねしろと言ったので来たんだといいうんです」

「ほう！」

まったく思い当るところはなかった。菅という姓にも記憶はない。

「何かの人違いじゃないかな。とにかく出てみよう」

九谷はすぐ玄関へ出て行ったが、なるほど制服を着た田舎の女学生らしい十六、七の少女が、ズックの鞄を提げて、身を固くして立っている。

「僕、九谷ですが——」

言いかけたとき、相手は顔をあげた。その瞬間、九谷ははっとした。瀬尾(せお)きみ子に生き写しであったからである。睫毛(まつげ)が長く、黒目の大きいところも、頬のゆたかなところ、少しおでこなところ、みんなそっくりそのまま、そこに瀬尾きみ子が立っている感じだった。

「あなたは信濃から——」

九谷が言うと、

「はい」

はっきり言って、目を静かに伏せたが、それも、そのまま瀬尾きみ子の素直さと同じだった。そして、やっとわかりました!? と言うように、くるっと瞳をいたずらっぽく廻したところ、これまた瀬尾きみ子の持っていたお俠(きょう)さに通ずるものであった。

「瀬尾さんの——？」

「はい。母は亡くなりましたが、もとの姓は瀬尾と申しました」

「そうですか。そりゃあ、なつかしい、まあお上がんなさい」

九谷は感慨無量だった。瀬尾きみ子の娘がここへ訪ねて来ようとは夢にも思ったことはなかった。
すぐ応接間へ通した。そして茶の間へ行って、妻の咲子に、
「昔知っていた人の娘さんだよ」
と言った。
「昔知っている方って、どなたですの」
正面切って言われると、九谷はちょっとたじろいだが、
「いつか話したことがあったろう。瀬尾きみ子——」
「ああ、昔のあなたの恋人！」
咲子はくすっと笑って、
「たいへんなお客さまね、でも、かわいらしい娘さん！お母さんの方でなくてよかった！」
「お母さんはもう亡くなったんだって！」
「まあ！」
咲子は、大げさな表情をしてみせたが、もちろん、一時だけのことで、
「御愁傷さまね、がっかりなさったでしょう」
あとは、夫の昔の恋人の娘が現われたことが、何か刺戟にでもなっているのか、浮き浮きした口調で、
「あなたには大切なお客さまね。早く行っておあげなさいよ。歓待してあげますわ。と言っても、娘さんだから、お羊羹かチョコレートね。コーヒーよりお紅茶の方がいいかしら」
九谷は、応接間で菅みさ子と向い合ってすわった。
「どうして訪ねて来る気になったんです」
「母さんが——」
と言いかけて、
「母さんと申しましても、二度目の母さんですが、母さんから、東京へ行って、もし時間があったら九谷さんをお訪ねして来るように言われたんです」
「ほう？」
ちょっとその意味がわからなかったが、みさ子は玄関まで行って、そこに置いてあった鞄から一通の封書を取り出して来て、それを卓（テーブル）の上に置いた。
封書の表には九谷利一様と達筆なペン字で認（したた）めてあり、裏は菅ぬい子と書いてある。
突然ですが、私にとっては義理の娘みさ子を差し出します。私は貴方様の御存じの菅きみ子の後添いとしまして、菅家に入った者でございますが、夫が先年亡くなり、現在は母娘二人さびしい生活を送っております。幸い、みさ子も御覧のように、丈夫に成育いたしました。絵を描いて、女流画家になりたいと申しておりますが、いかがなものでございましょう。私はみさ子を行く行くは平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡な家庭の主婦とさせたい考えですが、当人はまだほんの子供で、当地の女学校を出たら、東京の美術の学校へ行くと一途に思い定めているようでございます。もし、それが心得違いのことでございましたら、お言い聞かせくださいますようお願いいたします。突然、ぶしつけなお願い、失礼とは存じますが、多少の御縁に甘えた次第でございます。

九谷は、これを読み終ったとき、菅ぬい子なる女性の考え方を、さして不思議には感じなかった。

九谷は、みさ子の生母であるきみ子と、もう二十年近い昔のことだが、田舎の新聞に大きく書きたてられるような恋愛事件を引き起したことがあり、それを、きみ子の後妻である菅ぬい子なる女性が知っていたとしても、別段不思議はなかった。

そして、ぬい子が、画家志望の娘の将来を打診してもらうために、たまたま画家として多少名前を世に出している九谷のことを思い出し、そこへ娘を差し向けたといっても、これまたいちがいに不自然とは言えなかった。

「お母さんはいつ亡くなりました？」

「私の五歳の時です」

「そうすると戦時中ですね」

「はい」

九谷は、かつて自分の恋人の生死さえも知らなかった戦争中から戦後へかけての、彼の生活のあわただしさというものを、今さらのように感じないわけにはいかなかった。多少の感慨はあったが、と言って、悲嘆というような感情の動き方はなかった。すべては、遠い昔のことであり、人生というものも、愛情というものも、結局はよくわからなかった頃の、いわばそれは一種の青春の熱病のようなものであった。

その時は、夢中になって、きみ子を思いつめたものであるが、はたして恋愛と言えたかどうかさえも、現在の四十男の知恵から推して考えると、すこぶる怪しいものになってくる。

やがて咲子は、珍しい少女の客をもてなすためにいろいろな食物を運んで来た。そしてそれを卓の上にいっぱい並べ、

「召しあがれ！」

そう言って、彼女はそれとなく好奇な目で信濃からやって来た少女を観察していた。

「御飯おすみになりましたの？」

「はい」

みさ子は、窮屈なのか、紅茶に口をつけると、もう立ち上がろうとした。

「ゆっくりできるでしょう」
「できませんの。九時までに旅館へ帰らないといけないんです」
彼女は言った。
「絵を描きたいんですって？」
九谷は訊いた。
「はい、描いたものを持ってまいりました」
くるっと目を上げたところは、怖れというものを知らない少女の素直さが美しく出ていた。
九谷は、彼女からスケッチブックを受け取って、それをめくった。それには、彼女の郷里である信濃の田舎町の風景や、女学校の校庭のスケッチなどが、なるほど少女にしては達者すぎるくらいのタッチで描かれてある。
「もっとちゃんと油で描いた作品があるんですが、持って来れませんでした」
それを持って来れなかったことが、いかにも不服そうであった。
絵の上手な少女であるが、もちろん将来画家として立てるかどうか、そんなことは打診できなかった。どの学校にも、一人や二人はかならずあるその程度の才能である。
九谷は、みさ子に、絵を描けとも、画家志望を諦めろとも言わなかった。こと二、三年のうちに、外部から誰が何と言わなくても、彼女自身、自分の志望を変えて行くだろうと思う。
「なかなか上手ですね」
そう褒めてやって、九谷はスケッチブックを返した。
一時間ほどすると、みさ子は九谷家の応接間の空気に馴れたらしく、学校のことや、こんどの修学旅行のことなどを、自分から話し、
「東京の学生に笑われないように、道を歩くときは大股で歩くんです」
そんなことを言った。咲子も、子供を持ったことがないので、そんなことを言うところがかわいく思われるらしく、とうとう、門限時刻だという九時まで引きとめ、旅館へ電話をかけて、彼女が叱られないように、引率教師にあやまってやり、二町ほどあるバスの停留所まで送って行ってやった。
玄関を出るとき、みさ子は思い出したように、サイン帳を出し、九谷にサインを求めた。サインしてやると、嬉しいのか、ちょっと首をすくめ、舌の先端を唇の間から覗かせた。九谷は、彼女の母親も持っていた癖だと思った。
咲子とみさ子が玄関を出て行くと、九谷はアトリエに戻った。美術雑誌の原稿の仕事があったが、手につかなかった。みさ子の小さい表情の一つ一つが、彼女の生母である

きみ子の表情と混乱して、目の前に次から次へと浮かび上がってきた。
「似ています？」
咲子は戻って来ると言った。
「似ている」
「嬉しかった？」
「嬉しくないこともない」
「いやな方！」
しかし、咲子は不快そうではなかった。
「かわいらしい娘さんね。一人ほしいわ、あんな人！　貰えないかしら」
「俺はいやだよ」
「そうね。あなたにはそうでしょうね。ほかの男の人との間にできた子供ですもの」
「かわいそうな子供だな」
「お父さん、お母さんとも早く亡くして！　でも次のお母さんというのも、よさそうね。ずいぶんかわいがっているらしいわ。外套も鞄も贅沢だし、下着も清潔だった！」
下着までは、九谷は気付かなかったが、みさ子は何不自由なく、すくすく伸びていると思った。そう思うことに、九谷はやはり一つの安堵に似た思いがあった。
その翌年の春、やはり前年と同じように、桜には少し早い時期に彼女はやって来た。こんどは、新聞社の美術展覧会に入賞して、それが百貨店に並ぶとかで、それを友だち五人と見に来たということだった。
「賞に入ったのは、わたし一人でしたの。でもお友だちのも会場に並んでいます」
みさ子は一年で、驚くほど背丈が伸びていた。九谷が知っていた頃のきみ子と同じほどの身長で、こんどはアトリエへ彼女を招じ入れたが、アトリエで九谷の旧作を見入っている姿は、九谷には、きみ子が立っているのではないかと思われたくらいだった。
時々、作品から目をはなし、九谷の方を見入ったが、九谷はそのたびに眩しくすぐったい思いをした。
「九谷さんは――」
みさ子は九谷のことを「九谷さん」と呼んだ。
「九谷さんは、わたしの母と伊那谷の方へいらしったことがあるんですってね」
みさ子がそう言ったとき、九谷ははっとした。みさ子は、そのことを誰からどのような言葉で聞いたものか知らなかったが、とんだことを知っているものだと思った。
「そう。行ったことがある……」
九谷は何気ないふうを装って言ったが、こうしたことには、神経のはたらく咲子は、

「あら、そんなことあったんですの」
と、ちかりと目を光らせた。
九谷は、自分ときみ子のことを、咲子には詳しく話していなかった。九谷は、きみ子と十日ほど、天竜川に沿って、伊那谷を旅行したことがあったが、誤解を招きそうだったので、このことには、一度も触れたことがなかった。
だから咲子は、これまで、九谷の単なる意中の人ぐらいにしか、きみ子という女性を考えてはいなかった。
咲子が何か言い出しそうにしたとき、みさ子は、
「九谷さん、そのとき、スケッチなさいました？　わたしも天竜峡ってところへ行って描いてみたいわ」
「そう、だいぶ描いたね、あのときは」
九谷は、そんな当りさわりのない言い方をして逃げた。
その時も、みさ子は友だちのところへ行くと言って、九時ごろ帰って行った。咲子は、みさ子に何か土産物を持たせてやって、門口まで送り出したが、帰って来ると、すぐ、
「いやだわ、天竜峡へいらしったの？　あの人のお母さんと——」
と言った。
「昔の話だよ」
「昔の話だっていまの話だって、いやなことはいやよ。おっしゃって下されば、いいのに」
その顔は少し真剣だった。
「なんでもない、写生旅行をしたんだ」
「匿されるといや！　ほかに匿していることがあるでしょう」
「もう、そう沢山はあるまい」
「何、言っているの」
「なんでもない旅行だからこそ、あの娘も言ったんだよ」
「そりゃあ、そうでしょうけど。あの娘さんでも知っていることを、わたしが知らなかったんですからね。悪人よ、あなた……」
咲子は言ったが、しかし、このことはその場かぎりですんでしまった。
その翌年、つまり去年の春は、みさ子は姿を見せなかった。
「今年は女学校を卒業するのだから、また、旅行か何かで、あの娘さん来るかも知れませんよ」
「そうだな、来るかも知れん」
「待ち遠しい？」
「だんだん似てくるからな」
「たいして美人とは言えないけど——」
「美人ではないが、かわいらしい」
「失礼ね」
「俺は、あの娘のことを言っている！」

「決っているじゃありませんか」
子供のない九谷と咲子は、よくこんな遣り取りをした。そしてべつだん待っているわけではなかったが、菅みさ子が姿を見せないとなると、やはり九谷は九谷で気抜けした思いだったし、咲子は咲子で、またどこか物たりぬ思いがあるようだった。

去年姿を見せなかった菅みさ子が、突然三度目に、九谷家の玄関の三和土の上に姿を現わしたのは、今年の四月の初めだった。
「来ましたわよ、来ましたわよ」
少しはしゃいで、咲子はアトリエへ入ってきた。
「誰が？」
「わかっていらっしゃるくせに！」
「菅みさ子か」
「そう。すっかり見違えちゃった。一年見ない間にいい娘さんになりました」
「すぐ上げろよ」
「あわてなくても、庭の方から廻って来ますわよ、いま」
菅みさ子は、咲子が言うように、庭の三分咲きの桜の木の下をこっちへやって来た。その姿は、もう女学生ではなかった。

和服を着て来たせいか、咲き盛っている花のような、ゆたかな、派手な感じだった。
「着物よく似合いますわ。きれいなこと」
咲子が言うと、
「初めて着ましたの。九谷さんのお宅へ行くんだからって、母に着せられました、いやでしたけど」
みさ子は言って、それから娘々した口調で、明るく九谷に挨拶した。
「こんどは何の御用事でいらしたの？」
咲子が言うと、
「式を挙げますので、その前に御挨拶に伺ったんです」
「式って、結婚式!?」
咲子は訊いた。
「はい」
「美術学校をやめて、お嫁さんか」
九谷も明るく笑った。
「お母さんも、これで一安心ですね。絵描きさんになるなんてたいへんなことだ。それに奥さんになってからでも、描こうと思えば描けるよ。娯しんでお描きなさい」
その時、九谷はふと咲子の方へ視線を投げたが、九谷が驚くほど、咲子は浮かない顔をして、庭のどこか一点を見詰めていた。

が、その顔がみさ子の方へ戻ると、
「お母さまは、こんなりっぱになったあなたを、わたしたちに見せていらっしゃいとおっしゃったんですか」
「はい」
「それだけで東京へ出ていらしたの？」
「ついでに映画も見ようと思ったんです」
「そう。よく小父さまに見て戴くのね。せっかくいらしたんですもの」
言葉のおわりの方が、少し震えていた。
その晩、みさ子は夕食を食べて、学校の友だちの家へ泊まる約束になっているからと言って帰っていった。
みさ子の居る間は、咲子も普通に応待して、機嫌よくしていたが、彼女が帰ってしまうと、ひどく疲れた表情で、
「わたし、何か騙されているみたい」
と言った。
「どうして」
「どうしてって！　変にお思いにならない？」
「思わんこともないがね」
「冗談にごまかしてはいや！　まじめにおっしゃってください。そうじゃありませんか。何のために、みさ子さんがお嫁に行く前に、わたしたちのところへ挨拶にくる必要があるんでしょう。こんなの、聞いたことないわ」
咲子に言われるまでもなく、このことは、九谷自身も少少奇妙に感じていた。何でもなく考えれば何でもないことだったが、少し気難しく考えれば、咲子が疑惑を持ってもさほど不思議とは言えぬようなものがあった。
「大体、一番最初の時、突然、訪ねて来ることさえおかしなことだわ。——あの娘、あなたの子供じゃないのかしら」
咲子は、いかにも怖そうに、低く静かに言った。
「遺憾ながら違うね」
「まじめにおっしゃって！」
「まじめに言っている」
「じゃあ、訊きますが、なぜ、あのひと、お嫁に行く前に、挨拶に来たのでしょう。親戚でもなし、知合いというわけじゃなし」
「知らんよ、そんなこと！」
「あなたのお子さんを、こんなに立派に成人させました。これからお嫁にやります。どうぞよく見てやってください——こう、あのひとのお母さんは——」
「よせよ、もう」
「父子対面ね」
「バカ！」
「バカなのよ。わたし」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com